

平成21年 4月30日現在

研究種目：基盤研究(C)  
 研究期間：2006～2008  
 課題番号：18520378  
 研究課題名（和文） 構文イディオムとその習得可能性に関する大規模コーパスに基づいた生成理論的研究  
 研究課題名（英文） A Large-Scale-Corpus Based Generative Theoretical Study on Constructional Idioms and Their Learnability

研究代表者  
 大室 剛志 (OMURO Takeshi)  
 名古屋大学・大学院国際開発研究科・教授  
 研究者番号：70185388

研究成果の概要：英語における結果構文と深く関連する構文イディオム及びそれと関連する英語の周辺構文について、大規模コーパスを利用し膨大な資料を収集することに成功し、そこからそれら構文イディオム等の統語的・意味的属性を明らかにし、それらの属性にたいして複数の言語理論からの説明を試み、構文イディオムの習得可能性の解明により近づくことが出来た。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	700,000	0	700,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
総計	2,000,000	390,000	2,390,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：言語学、英語、生成文法、大規模コーパス、構文イディオム、統語構造、意味構造、習得可能性

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 世界最大の現代英語コーパスThe Bank of English (約6億語)に加えて、The British National Corpus(約1億語)を利用できるコーパス環境が申請者の研究室には既に整っている。また、webをコーパスに見たて、適切に検索する技術も獲得している。そのため、今迄にない多くの新しい言語事実の発掘と緻密な記述を行うことが可能となる。

(2) 単一の言語理論に留まることなく、構文

イディオムとその習得可能性を解明するうえで、欠くことのできない生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法といった複数の言語理論に通じているため、(1)から得られる多くの言語事実と緻密な事実観察がもたらす諸理論に対する問題点を浮き彫りする能力を有する。

(3) 従って、語法文法家やコーパスを利用した研究者はとかく言語事実面に片寄り、理論

言語学者は理論的説明にとかく片寄りがちであるが、大規模コーパスと言語理論をうまくドッキングさせるという独創的な手法により、言語理論を真に押し進める実証面と理論面がバランスよく融合した研究成果が期待できる。

## 2. 研究の目的

本研究の具体的な研究目的は研究課題に盛り込んだ次の3点である。

(1) 現代英語において構文イディオムを構成する複数の表現、具体的には、私自身の最近の研究で発見された結果構文に基づいた構文イディオム (You scared the living daylights out of me. この場合、主に動詞 scare の部分と更には名詞句 the living daylights の部分迄もがそれぞれある一定の別の語 (句) で置き換え可能)、体内移動構文 (I got to my feet. この場合 got の部分を一定の動詞で置き換え可能)、'd rather + S 構文 (I'd rather you didn't. この場合、'd rather に続く S (sentence) の部分が仮定法過去の文を中心に様々な文で置き換え可能)、One's Way 構文 (I made my way to the Savoy. この場合動詞の部分がある一定の別の動詞で置き換え可能) を、1つ1つ取り上げ、英語の周辺部を成すこれらの構文イディオムの解明に、特に有効である上記3つの現代英語の世界最大規模コーパスを用いて、母国語話者の直感や手作業による資料収集だけでは気付くことのない言語事実の発掘を徹底して行い、これらの構文イディオムの統語的意味的属性を徹底的に解明する。

(2) (1) で解明された統語的意味的属性を生成文法の統語理論、概念意味論、動的言語理論、構文文法といった複数の最先端の言語理論を用いて分析し、形式化した形で精密に記述する。これらの分析と記述を通して、4つの構文イディオムがこれら複数の言語理論にもたらすそれぞれの理論上の問題点を考察

し、それらの問題を克服できるように理論上の修正を施す。

(3) kick the bucket のような通常の句イディオムは、完全に固定化しているため、レキシコンに記載され、単語を習得するように、子供も個々に習得すると考えられる。他方、変項のみで構成される通常の句構造規則 (例えば、VP→V NP) は完全に生産的で、その規則さえ習得すれば、その規則に合う無数の表現を子供は一々習得する必要はない。しかし、ここで取り上げる4つの構文イディオムは、一部が定項で一部が変項で記述されるため、いわば、語 (word) と規則 (rule) のまさに中間に位置し、単純にレキシコンで扱ってよいのか、非常に興味深い言語理論上の問題を提出する。また同時に、子供がどのような方略を用いてこのような一部が定項で一部が変項からなる構文イディオムを習得するのかという生成文法にとって重要な習得可能性の問題も提起する。この習得可能性を説明しないで、ただ構文イディオムを記述していても、構文イディオムを真に説明したことにはならない。本科研では4つの構文イディオムの背後に共通して働いている習得のメカニズムを抽出することで、構文イディオムの習得可能性を説明することに迫りたい。

## 3. 研究の方法

(1) 本科研で扱う結果構文に基づいた構文イディオム (You scared the living daylights out of me.)、体内移動構文 (I got to my feet.)、'd rather + S 構文 (I'd rather you didn't.)、One's Way 構文 (I made my way to the Savoy.) を、1つ1つ取り上げ、英語の周辺部を成すこれらの構文イディオムの解明に、特に有効である3つの現代英語の世界最大規模コーパス The Bank of English (約5億2千万語)、The British National Corpus (約1億語)、The American National Corpus (近々

約1億語公開、但し、現在はFirst Release 1千万)を用いて、母国語話者の直感や手作業による資料収集だけでは気付くことのない言語事実の発掘を体系的、包括的、且つ網羅的に徹底して行う。

(2) 拙論(i)「構文イディオムyou scared the living daylights out of meについて」『英語語法文法研究の新展開』, 77-83. 英宝社. (2005) (ii) “A Dynamic Approach to the *One's Way*-Construction in English: From Simple Composition to Phrasal ‘Lexical’ Idioms to Constructional Idioms, ” Empirical and Theoretical Investigations into Language: A Festschrift for Masaru Kajita, 588-603, Kaitakusha, Tokyo. (2003) (iii) 「基本タイプに支えられた派生タイプの豊かさ」『英語教育』9月号, 63-65, 大修館書店. (iv) 「I'd rather you leave now. のyouは主格か目的格か。」『英語青年』1月号, 56-57, 研究社. (2002)以降に書かれた他の研究者による本科研で取り上げる4つの構文イディオムに少しでも関わりを持つあらゆる記述的な研究文献と理論的な研究文献を読み、それら研究文献から、さらに4つの構文イディオムに関しての理解を深める。

(3) 4つの構文イディオムにかかわる先行研究の文献でなされている分析の理論上の問題点に対して習得可能性を考慮しながら理論的解決を与えるように試みる。その際、申請者は既に*One's Way*構文に関して、その習得可能性をも考慮しながら、分析、説明を試みた学術論文、上の(2)の(ii)を執筆しているので、そこで採られた研究方法とその研究成果が他の3つの構文イディオムが抱える理論上の問題点を解決するのに援用できないかを、各構文イディオムごとに検討することとする。同時に*One's Way*構文に関しても、上記拙論の不備をも修正していくこととする。

(4) 更に、平成18年度の研究で抽出した4つの

構文イディオムのそれぞれの統語的属性と意味的属性と語用論的属性を理論的に説明する。その際にも、上記論文で採られた研究方法とその研究成果を援用できないかを考えることにする。

(5) 本科研で新たに発掘された興味深い統語的属性と意味的属性と語用論的属性を本科研の記述面での研究成果として、英語語法文法学会あるいは英語コーパス学会などでの口頭発表を行う。

(6) 本科研の理論面での研究成果を、日本英文学会あるいは日本英語学会などで口頭発表し、論文を執筆する。

#### 4. 研究成果

(1) 本科研で扱う結果構文に基づいた構文イディオム (You scared the living daylights out of me.)、体内移動構文 (I got to my feet.)、'd rather + S構文 (I'd rather you didn't.)、*One's Way*構文 (I made my way to the Savoy.) を、1つ1つ取り上げ、英語の周辺部を成すこれらの構文イディオムの解明に、特に有効である現代英語の世界最大規模コーパスThe Bank of English(約5億2千万語)、The British National Corpus(約1億語)を用いて、母国語話者の直感や手作業による資料収集だけでは気付くことのない言語事実の発掘に努めた。

(2) 本科研を遂行する上で必要となる大規模コーパスに関する知識が集中的に得られこともあって、英語コーパス学会から要請があった第28回大会の司会を引受けると同時に学会に参加し、貴重な研究資料を得た。そして、研究発表1及び研究発表2の司会者による研究発表報告を英語コーパス学会Newsletter 55に執筆した。

(3) 本科研のテーマの一つである'd rather + S構文 (I'd rather you didn't.)を含めて、構文とそれを分析する言語理論に関して第2回英語語法文法セミナーにおいて講師を

務めないかという要請が英語語法文法学会よりあったので、「文法の拡張」と題して講義を行った。

(4) 本科研は、研究題目に含まれるように生成理論による研究であるが、生成文法についての平易な紹介を書くように出版社から依頼があったので、自分の頭の中を整理する上で役立つと考え、「言語能力の解明としての言語学」を『新英語学概論』（英宝社）の1つの章として執筆した。本科研を通じての社会貢献となった。

(5) 本科研は構文イディオムの研究であるが、それを一部扱った理論言語学の大著 *Simpler Syntax* を書評するよう日本英文学会から依頼要請があったため、書評した。これにより、生成文法統語論と概念意味論の理解が格段に深まった。

(6) 学術雑誌『英語青年』より「形式と意味のミスマッチ」に関する論文を書くよう依頼があったので、本科研と深いテーマなので、執筆した。

(7) 19年度は、本科研で扱う結果構文に基づいた構文イディオム (*You scared the living daylights out of me.*)、体内移動構文 (*I got to my feet.*)、'd rather + S構文 (*I'd rather you didn't.*)、One's Way構文 (*I made my way to the Savoy.*) を、1つ1つ取り上げ、それぞれの構文イディオムが習得可能性の観点から、構文理論、生成統語論、動的文法理論にたいしてどのような理論上の問題点を提起するか、18年度におこなった大規模コーパス調査による言語事実に基づき考察するように努めた。

(8) 大規模コーパスを使用するため、著作権の問題を扱った立命館大学シンポジウムの「コーパス研究と知的財産権:FAQ」を聞き、詳細で有益な情報を得た。また、習得可能性を扱うため、The 9<sup>th</sup> Annual Conference on Psycholinguistics に出席し、言語習得理論

及び一般言語理論に関する最先端の情報を得た。Cedric Boeckx氏の講演は、極小主義において媒介変数をどの部門に置くかを考察し有益であった。

(9) 本科研のテーマの一部、構文と深い関係にある「類義動詞がどのような構文で用いられるか」を扱った小野経男著:『英語類義動詞の構文事典』を出版社から書評するよう依頼があり、執筆した。

(10) 構文内の形式と意味のミスマッチを論じた英文による論文を執筆し、大津由紀雄先生還暦記念論集に載せていただいた。

(11) 本科研で扱う構文イディオムのうち、18年度と19年度におこなった大規模コーパス調査により明らかになった、One's Way構文 (*I made my way to the Savoy.*) の変種で、wayのところをwaysとなるものを中心に、その他関連構文4つの変種も含め、それらの変種が何故可能になるのかについて、構文理論、動的文法理論の観点から考察し、その研究成果を2008年5月25日に広島大学で行われた日本英文学会第80回大会のシンポジウム『事例研究から見た英文法の一断面』において「構文の変種」という題目で講師として口頭発表した。その口頭発表の内容の一部を日本英文学会発行の『第80大会Proceedings』に「構文の変種」として執筆し、印刷された。

(12) 本科研は、大規模コーパスを利用することで新たに発見された言語事実をいかに言語理論から説明するかということと深く関わっている。そこで、本科研で扱う構文イディオムと深い関係にある英語の特殊な構造で、副詞が項に相当する補部をとる構造を取り上げ、大規模コーパスを用いて調査し、その内部構造、外部構造、意味解釈を明らかにした。そして、その特殊構造を説明するのに、統語的アプローチ、意味的アプローチ、動的なアプローチのどれがふさわしいかについて考察した。その研究成果を、2008年11

月16日に筑波大学で行われた日本英語学会第80回大会のシンポジウム『英語構文研究：言語理論とコーパス』において「補部をとる副詞について：周辺部の分析に役立つ大規模コーパス」という題目で講師として口頭発表した。その口頭発表の内容の一部を青山学院大学教授秋元実治先生の退職記念論集に執筆させていただいた。目下、記念論集は編集作業中である。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 6件)

(1) 大室剛志、「補部をとる副詞について—*differently* と *independently* の意味を中心に」『秋元実治教授退職記念論集』、査読有、2010年 - (発刊決定)。

(2) 大室剛志、「構文の変種」『第80大会 Proceedings』、査読有、2008年、pp. 200-202.

(3) OMURO, Takeshi, “Syntax-Semantics Mismatch and Determiners of Cognate Objects” *An Enterprise in the Cognitive Science of Language: A Festschrift for Yukio Otsu*, 査読有、2008年3月、pp. 79-85、ひつじ書房。

(4) 大室剛志、「書評：Peter W. Culicover and Ray Jackendoff: *Simpler Syntax*, Oxford University Press, 2005. xvii + 589pp.」『英文学研究』、査読有、2007年11月号、pp. 297-302.

(5) 大室剛志、「書評：小野経男著：『英語類義動詞の構文事典』」『英語教育』、査読有、2007年11月号、pp. 93-93.

(6) 大室剛志、「特集：形式と意味のミスマッチ「形式と意味のミスマッチと同族目的語の決定詞」」『英語青年』、査読有、2007年2月号、pp. 19-21.

〔学会発表〕(計 3件)

(1) 大室剛志、「補部をとる副詞について：周辺部の分析に役立つ大規模コーパス」、日本英語学会第26回大会シンポジウム、2008年11月16日、広島大学。

(2) 大室剛志、「構文の変種」、日本英文学会第80回大会シンポジウム、2008年5月25日、広島大学。

(3) 大室剛志、「文法の拡張」、英語語法文法

学会主催第2回英語語法文法セミナー、2006年8月8日、関西学院大学大阪梅田キャンパス。

〔図書〕(計 1件)

(1) 大室剛志、英宝社、『新英語学概論』(「第二部第III章 言語能力の解明としての言語学」担当)、2006年、pp. 90-97.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

大室 剛志 (OMURO Takeshi)

名古屋大学・大学院国際開発研究科・教授  
研究者番号：70185388